

昔むかしのことです。

ある日、皇帝が、からだのしらみをとって、のみを見つけました。皇帝は、このみにえさをやって、やって、やって、ふとらせて、皮をはぎました。それから、国じゅうにおふれを出しました。

「これが何の皮だか当てたものがあれば、姫と結婚させよう」

国じゅうから、人びとが、何の皮だか当てようと、お城に集まって来ました。

「これは、ぶたの皮です」と、ひとりがいうと、

「これは、牛の皮です」と、もうひとりがいい、

「水牛の皮です」と、だれかがいうと、

「ひつじの皮です」と、ほかのだれかがいいいます。

みんなは、ああだこうだといいいましたが、ひとりとして当てることができませんでした。

しまいには、悪魔がやって来ました。悪魔は、知らないようなふりをして、

「これは水牛の皮です」といったり、「やぎの皮です」といったり、「うさぎです」といったりしていましたが、とうとうしまいには、「うん、これはのみの皮です」とさげびました。

皇帝は、まさか、こいつが悪魔だとは知らなかったのです、お姫さまと結婚させることにしました。すると、そこいらじゅうから、悪魔という悪魔が集まってきて、みんなでお姫さまを連れて行ってしまいました。

お姫さまは、しばらく行ったところで、自分が悪魔の手に落ちたことに気づきました。そこで、手紙を書いて、はとの足にむすびつけ、お城に向けて飛ばしました。

「お父さま、わたしは悪魔に嫁いでしまいました。連れもどしてくださいまし」

これを読んだ皇帝は、国じゅうにおふれを出しました。

「姫を悪魔からうばいかえした者は、姫と結婚させよう」

ふたたび、国じゅうから人びとが集まってきました。けれども、皇帝は、だれひとり気にいらず、お姫さまをうばいかえしに行かせようとしませんでした。

あるとき、六人の兄弟がやって来ました。皇帝は、兄弟たちに、

「おまえたちは、どんな力があるのだ」とききました。

一番上の兄が、いいました。

「わたしは、力じまんで、石うすを両手で押しつぶして水にすることが出来ます」

二番目がいいました。

「わたしは、うさぎに気づかれずに、うさぎのあなから子うさぎを盗むことが出来ます」

三番目が、いいました。

「わたしは、陸を走るのでなく空を飛ぶのでもない車をつくることが出来ます」

四番目がいいました。

「わたしは、うんと遠くの音を聞くことができます」

五番目がいいました。

「わたしは、またたくまに、わたしたちみんながくれられるほど大きな塔を建てることが出来ます」

さいごに、末の弟がいいました。

「わたしは、大鷹がシヤコをつかまえて飛んでいるのを見たら、やりを投げて大鷹にだけ当てることができます。そして、落ちてきたシヤコを両手で受けとめます」

皇帝はいいました。

「姫を救えるのは、おまえたちのほかにいない。行け！出立せよ！」

六人の兄弟は旅立ちました。

行くが行くが行くうちに、みんなは、のどがかわいてたまらなくなりました。そこで、一番上の兄が石うすを両手で押しつぶしました。すると水になったので、みんなはかわきをいやすことができました。

行くがいくが行くうちに、とうとう、悪魔たちが牧場で休んでいるのを見つけました。

お姫さまは、悪魔のかしらのひざにすわって、かしらのしらみをとっていました。そこで、二番目が、悪魔に気づかれずにお姫さまを盗んで来ました。すると、三番目が、陸を走るのでなく空を飛ぶのでもない車をつくりました。みんなはそれに乗って出発しました。

みんなは、逃げに逃げました。ずっとたってから、ようやく悪魔たちは、お姫さまがいなくなっているのに気づきました。そして、すぐさま追いかけてきました。

みんなは、四番目に、

「悪魔たちが近くまで来ているかどうか聞いてくれ」といいました。

「こわがらなくてもいいぞ。まだずっとむこうだ」と、四番目はいいました。

みんなは、いよいよ遠くへ、逃げに逃げました。ふいに、四番目がさげびました。

「気をつける、つかまりそうだ！すぐ近くまで来たぞ」

みんなは、五番目に、

「早く塔を建てろ！」とさげびました。またたくまに、五番目はがんじょうな塔を建て、みんなはその中にかくれました。塔には、ごく小さいあながひとつあるだけでした。人間の小指がやっと入るくらいのあなでした。

そこへ、悪魔たちが追いついてきて、塔のまわりをとり囲かこみました。けれども、入り口は見つかりません。ようやく、悪魔のかしらがあなを見つけました。

「おまえたちは、おれから姫をうばったな。だが、せめてこのあなから姫の小指だけでも見せてくれ」

兄弟は話し合いました。

「まあ、いいだろう。そうしたからといって、やつらはお姫さまを取り返せないんだから」

そこで、お姫さまはあなに小指を入れました。悪魔のかしらはその指をつかんで、ぐいと、お姫さまを塔の外へ引っっぱり出しました。

六人の兄弟があわてて外へ出てみると、悪魔のかしらがお姫さまをかかえて空を飛んでいきます。末の弟が、やりを投げました。やりは悪魔のかしらにつきささりました。

お姫さまが落ちてきて、末の弟が、両手で受けとめました。

それから、みんなそろって、お城に帰りました。皇帝はお姫さまにききました。

「では姫や、おまえを悪魔からうばい返してくれたのは、兄弟のうちだれかね」

お姫さまは答えました。

「お父さま、みんなしてわたしをうばい返してくれたのです。でも、末っ子の人がいなかったら、わたしは、あのいやらしい悪魔のもとにずっといるしかなかったでしょう」

そこで、皇帝は、お姫さまと末の弟を結婚させました。それは、これまでだれも見なかったようなすばらしい結婚式でした。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話4東欧1』飯豊道夫訳／ぎょうせい